

書 評

図説 地球の歴史

小泉 格 著

朝倉書店

2008年6月20日発行, 143pp.

ISBN978-4-254-16051-2, 3400円 (税別)

科学史をみると、巨大資本が集中的に投資されることによって科学の進歩が大きく進むことがわかる。20世紀後半の海洋研究が、まさにその典型的な一例で、深海掘削計画のような巨大プロジェクトが学術的な成果を支える基盤となっている。20世紀後半の海洋科学に大きな影響を及ぼした最初の巨大プロジェクトは、モホール (Mohole) 計画である。これは海洋地殻とマン托ルの境界を貫通し、マン托ルに達するような深部掘削を行う計画であった。しかし、この野心的な計画は、財政上の負担が大きすぎたため中止された。それに代わる計画として浮上したのが深海掘削計画である。深海掘削計画は、1966年に開始された深海掘削計画 (DSDP) を皮切りに、国際深海掘削計画 (IOPD, ODP), 統合国際深海掘削計画 (IODP) と名前を変え、現在も継続されている。

深海掘削計画は40年以上の長きにわたっているため、その成果は膨大なものとなっている。本書は、この計画の近年の成果を簡潔に総括し、それと並行して行われた海洋研究の成果も取り込み、「海洋環境の変化と変動」を総括することを試みた良書である。深海掘削計画の初期 (DSDP) の頃は、その科学目標はプレートテクトニクスの証明にあった。この頃の深海掘削計画の成果に関しては、「地球科学に革命を起こした船」(ケン・シュエ著、高柳洋吉訳、東海大学出版会) に詳しく記述されているので、それもある程度読まれることをお勧めする。

さて、本書は、1. 深海掘削, 2. 中生代, 3. 新生代, 4. 第四紀, 5. 一次生産による有機物の生成と二酸化炭素, 6. 珪藻堆積物の形成と続成作用, 7. 南極と北極, 8. 日本海の8章からなる。1章は、深海掘削計画の概要とその歴史が書かれている。この章では、実際に「モノを採取」することの重要性が強調されている。今まで取れなかった研究資料を採取することがどれだけ重要かを、この章は改めて強調している。その後の4章では、深海掘削から明らかにされた地球の歴史を概観している。海洋からみると、地球の気候は、白亜紀の非氷河性の気候から新第三紀や第四紀の氷河性寒冷気候へと移り変わっていく。特に、第4章は完新世を含み、未来予測に関して重要であるため、多くの最新の成果も言及されている。5章では、それらをふまえ、今後の地球環境の未来予測をする上で重要な二酸化炭素の循環とその増加問題に触れている。また、海洋の一次生産量は、二酸化炭素を制御する重要な要因となっているため、6章では一次生産者の重要な生物である珪藻に関して解説がなされている。著者は、この珪藻化石の専門家であるため、詳細かつ明瞭な解説となっている。

7章では、極域の変動が扱われている。南極や北極は、気候の変動が最も鋭敏に現れるので、温暖化などの気候変動の研究には欠かせない地域となっている。本書では両地域の最新の研究成果がまとめられている。最終章では、日本海の環境変遷に関して言及されている。環境の研究においては、地域や研究分野の個別情報が重要視されるが、その情報から地球規模の現象を読み取ることが重要となる。本章では、日本海という地域的な海域からも地球環境の変遷を十分読み取れることの実例が示されている。このように、日本の周辺でも十分に環境の研究が行うことができることを示すとともに、長い間、著者の研究フィールドであった日本海に対する思い入れも感じられる一章となっている。

本書には、これらの8章以外に、11のコラムがあり、それぞれで近年の研究で重要となった概念に関して簡潔にまとめられている。

その中には、ボンドサイクルなど、太平洋ではあまりなじみのない概念であっても、古海洋学にはその知識が必要不可欠なものが数多く含まれている。これらの概念は、個々の論文では記述されているが、なかなか簡潔にまとめられているものは少ないので、本書を読めば、それらの概念がどのようなものであるか比較的容易に理解することができるであろう。

また、本書の特色は、「図説」と銘を打っているだけに図表が多いことである。各章ごとに10をこえる図表を使用されているので、本文の理解がしやすい。それらの図表も、本文の解説に重要であると思われるものが適切に選ばれている。本書に一つだけ不満がある点とすると、新生代以前の記述がやや少ない点にある。白亜紀などの時代は、温暖化が進行した環境モデルとして参考となることから、近年の多くの研究がなされている。この部分がややかけられているように思われる。しかし、この点を差し引いても、本書は古海洋・古環境の講義に教科書や副読本と使用できるすぐれた著書であることには変わりはない。特に、これから古海洋を学びたいと考えている学部学生、大学院生には有益な本となるであろう。

西 弘嗣 (北海道大学大学院理学研究院)

学術集会参加報告

「第7回国際頭足類シンポジウム (札幌)」参加報告

シンポジウム

第7回国際頭足類シンポジウム (Seventh International Symposium, "Cephalopods-Present and Past") が、北海道大学の学術交流会館において2007年9月14日~16日の日程で開催された。前回、アメリカ合衆国アーカンソー州のアーカンソー大学で開催されたシンポジウムから3年振りの開催である。

今回のシンポジウムには、14の国 (日本, アメリカ, ロシア, チェコ, ドイツ, フランス, 中国, ハンガリー, ポーランド, スイス, エジプト, イラン, スペイン, イギリス) から、約100人もの参加があった。札幌での開催ということもあり、日本人の参加が最も多く、大学院生の参加も多かった。参加者は、化石頭足類を専門とする研究者が多数を占めたが、シンポジウム名の「Present and Past」に象徴されるように、日本人を中心に現生頭足類の研究者もかなりの数に上った。

講演は、48件の口頭発表と34件のポスター発表が行われた。口頭発表は150人前後が収容できる1会場で行われ、以下のテーマのセッションが順次進められた。① Paleobiological aspects of fossil cephalopods, ② Biological aspects of modern Coleoidea, ③ Cephalopod taphonomy and new techniques, ④ Paleobiology and systematics of Mesozoic Ammonoidea and Coleoidea, ⑤ Biostratigraphic and paleobiogeographic aspects of Ammonoidea, ⑥ New approaches to cephalopod biology and paleobiology, ⑦ New approaches to cephalopod paleobiology and biogeography, ⑧ Paleocology, biostratigraphy and extinction of Ammonoidea.

1日目 (9月14日) には、口頭発表のみが行われ、棚部一成博士の挨拶の後、前半は化石頭足類についての系統や殻構造などの生物学的側面からの発表が行われた。後半は現生頭足類に関する発表が行われた。また、セッションの間の休憩時間には、参加者全員での記念撮影も行われた (図1)。夜には、ホテル モントレ・エーデルホフで歓迎パーティーが行われ、開催会場である北海道大学の岡田尚武博士の挨拶から始まり、名誉委員の佐藤正博士らのスピーチの後、たくさんの料理や飲み物が振る舞われ、各国の研究者らと親交を深めることができた。

2日目(9月15日)には、午前中に頭足類のタフオノミーや化石頭足類の新しい観察方法に関するセッションと、中生代アンモノイド類やコレオイド類の古生物学・系統学に関するセッションが行われた(図2)。ポスター発表は、15日と16日の2日間に渡って行われ、15日の午後1:30~3:00には、ポスター発表のうち半数について、コアタイムが設けられた。筆者らはポスター発表を行った。ポスター発表のコアタイムの後、アンモノイド類の生層序や古生物地理に関するセッションが行われた。

最終日の(9月16日)には、午前中に化石および現生頭足類の生物学・古生物地理についての様々なアプローチに関する講演が行われた。午後1:30~3:00には、残りのポスター発表のコアタイムが設けられ、その後、アンモノイド類の古生態・生層序・絶滅に関する口頭発表のセッションが行われた。すべての講演終了後に、今回のシンポジウム開催国を決定するための投票が行われた。フランス、スイス、チェコの三カ国が次回2010年の開催地として立候補し、投票の結果、フランスのディジョンが選ばれた。夜はサッポロビール園に移動し、ジンギスカンを食べながらビールを飲み、大いに盛り上がり、フランスでの再会を互いに誓い合った。

筆者らは、化石頭足類の研究を進めているとはいえ、普段は、自分の研究テーマに関係する論文ばかり読んでしまいがちである。しかし、今回のシンポジウムでは、現生も含めて頭足類の話題を幅広く聞くことができ、今後の研究を進めるにあたって、とても良い刺激になった。特に、化石頭足類を元素マッピングなど駆使して観察する研究や、殻の真珠層の結晶学的な研究などの発表が興味深かった。また、シンポジウムでは様々な工夫がなされており、例えば日本での開催ということで異常巻きアンモナイト(*Nipponites mirabilis*)のタイプ標本のレプリカが、約100人もの参加者全員に配られたのも印象的であった。なお、本シンポジウムの発表は、論文集として出版される予定である。

巡検

シンポジウムの後には2つの巡検が行われた。1つ目の巡検は、シンポジウムが終わった翌日(9月17日)に行われた日帰り巡検で、三笠市を中心とした白亜系蝦夷層群のアンモナイト群集と層序を見学するものであった。蝦夷層群の模式地の1つでもある幾春別川沿いに分布する三笠層下部の露頭を観察し、化石採集を行い、セノマニアン階を代表する *Mantelliceras* などのアンモナイトや二枚貝類を採集した(図3)。その後、昼食をかねて、三笠市立博物館に移動し、質・量ともに最上級のアンモナイトコレクションを見学した。そして、館より30km程南の熊追沢へ移動し、コニアシアンサントニアンの暗灰色泥岩の観察・化石採集を行った。なお、この日には、早稲田大学の平野弘道博士の一般普及講演会が三笠

市立博物館で行われた。

もう1つは、3泊4日(9月18日~9月21日)の日程で行われた巡検で、北海道北部天塩中川地域に分布する蝦夷層群を観察するものであった。参加者は28名(7カ国)及び北海道内の化石愛好家の方々であった。初日と最終日は、ほとんどがバスでの移動に費やされたが、車窓から見える北海道の風景は美しく、飽きることがなかった。初日は中川町に到着後、まず中川町エコミュージアムセンター(自然誌博物館)を訪問した。中川町長より英語での歓迎の挨拶をいただく等、心からの歓迎を受けた。また、博物館の常設展および、特別展で展示されていた35点もの *Nipponites* やその他の異常巻きアンモナイトは、海外研究者たちの注目を集めた。夜には町内の料理店で歓迎会が開催された。また、同時に、公民館では東京大学の棚部一成博士の一般普及講演会が催された。多数の聴衆があり、町民の方々のアンモナイトへの関心の高さが視われた。2日目は学校の沢および仁尾川での巡検がおこなわれ、非常に多くの化石を採集することができた。3日目は遠別町ウツ川の露頭観察およびアンモナイトの *Metaplecticerias* の採集を行った(図4)。その後、安平志内川でメタン湧水起源石灰岩にみられる化学合成群集の生物相遷移を観察し、さらにオソウシナイ川沿いでのアンモナイトをはじめとする化石の採集など、非常に内容の濃い巡検が続いた。シンポジウム開催という重責を果たした安堵感からか、委員長の棚部博士が巡検では、生き生きと化石採集している様子が印象的であった。夜は当然(?)毎晩欠かさず親睦の杯が交わされ、こちらも非常に有意義なものであった。

なお、上記巡検の詳細な解説は三笠市立博物館紀要の自然科学第11号(2007)に掲載されているので、そちらを参考にしていたければ幸いである。

終わりに

私たちが会場係としてほんの少しお手伝いさせていただきましたが、シンポジウム開催に特に尽力されました棚部一成博士、平野弘道博士、重田康成博士、西弘嗣博士、佐々木猛智博士、伊藤泰弘博士、ロバート・ジェンキンズ博士、またその他会場運営にあたられました北海道大学COE事務局の皆様と学生の方々に深く感謝いたします。また、シンポジウム後の巡検でご尽力いただいた疋田吉織博士、および中川町エコミュージアムセンターの博物館ボランティアの方々にも感謝申し上げます。

御前明洋(北九州市立自然史・歴史博物館)・藤川将之(秋吉台科学博物館)・辻野泰之(徳島県立博物館)・西村智弘(京都大学大学院理学研究科)



図1. シンポジウム参加者の集合写真(北海道大学学術交流会館前にて)。



図2. シンポジウム会場での口頭発表の様子。



図3. 三笠市幾春別川沿いの蝦夷層群三笠層の大規模露頭の直下で化石を採集する参加者。



図4. 遠別町ウツツ川沿いに露出する蝦夷層群函淵層から採集された *Metaplacenticer*.)

学会記事

日本古生物学会（2007・2008年度） 第3回定例評議員会議事録

日時：2008年7月3日（木）13:30-18:00

場所：東北大学片平キャンパス材料・物性総合研究棟1号館1階大会議室

出席：小笠原会長、安藤、遠藤、長谷川、平野、加瀬、北里、甲能、近藤、前田、間嶋、真鍋、松岡、西、尾田、大路、棚部、生形、植村

欠席：松本名誉会長、安達（→遠藤）、天野（→間嶋）、富田（→真鍋）、大野（→前田）、矢島（→小笠原）、柳沢（→生形）

書記：中島、鈴木庶務幹事

報告事項

常務委員会報告（生形）

庶務（生形）

1. PR競争入札の開札の結果、学術図書印刷株式会社が2,676,240円で落札した。
2. 熊本大学より叙勲申請のための資料提供依頼があり、情報を提供した。
3. 日本学術会議より「公益法人に関するアンケート」の依頼があり、回答した。事業支出に対する遊休財産の割合などを問う内容であった。
4. 日本学術会議の「知の統合に向けた科研費システム改革のための有識者調査」に回答した。
5. 上越教育大学より叙位申請のための資料提供依頼があり、情報を提供した。
6. 特別号の図についてカンサス州立大学のRonard R. West氏より使用許可申請があり、使用許可書を送った。対象論文と転載先は以下の通り。

対象論文：Ota, N., Sugiyama, A. and Ota, M. (1969), 14, 1-12.

Fig. 5.

転載先：Treatise on Invertebrate Paleontology, Part E, Porifera Revised 4.

7. 学術振興会より第24回国際生物学賞の推薦依頼があった。評議員MLで推薦を募ったが、今のところ推薦はない。推薦締め切りは5月16日。
8. 科学技術復興機構より「学協会の会議開催予定・発行刊行物」に関する調査の依頼があり、回答した。
9. 故菅野三郎名誉会員のお別れ会に学会名義で弔電と献花を送った。
10. 北海道大学21世紀COEプログラム「新・自然史科学創成」事務室より、本会後援のシンポジウム「The Origin and Evolution of Natural Diversity」の抄録が届いた。
11. 文部科学省より、科研費研究成果公開促進（B）の不採択通知があった。
12. 学術振興会より、科研費研究成果公開促進「学術定期刊行物」の採択通知があった。
13. 学術振興会より第5回国際生物学賞の授賞候補者推薦要項が届いた。推薦主体はあくまで機関または個人だが、評議員MLで周知した。
14. 財団法人自然環境研究センターから生物技能検定の案内があった。評議員MLで周知した。
15. 国立情報学研究所より、論文情報ナビゲータ“CiNii”の機関定額制還元金の増額について通知があった。
16. 国際地学オリンピック日本委員会に対して協賛金一口10万円を拠出する旨返答した。
17. 琉球大学と沖縄県教育委員会に第158回例会の共催申請書を提出した。
18. 群馬県立自然史博物館より企画展「きれいで不思議な貝の魅力」への後援依頼があり、承諾書を送った。
19. 国際古植物学会・国際花粉学会共同開催(2012年東京)について、国内招聘準備委員会の植村和彦君より共催依頼があり、これを了承した。
20. UniBioPressと「Paleontological Research電子投稿査読編集作業にかかる業務委託契約についての覚書」を取り交わした。
21. 学会から情報提供した科研費審査委員候補者について、学術

振興会よりデータベースに登録した旨連絡があった。

22. 賞関係の賞状の筆耕等を発注した。

23. 学術会議より「新法人法への対応シンポジウム－学協会の公益性の確立に向けて－」の案内を受け取った。7月29日に日本学術会議で開催される。

渉外（柳沢）

1. 採択された科研費「学術定期刊行物」の交付申請書を提出し、振込先の銀行口座を作った。
2. 「地質の日」事業推進委員会から要請があった印刷物作成における費用の一部負担について、学会から1万円を拠出した。

会計（間嶋）

1. 出版物販売に関わる謝金の支出を認めた。
2. 欧文誌の電子投稿システムの変更経費を認めた。
3. 会費自動引き落としについて検討中。
4. 平成19年度決算案及び20年度予算案を作成した。
5. 仙台年会・総会の学会参加費を、一般会員は5,000円から4,000円に、友の会・学生会員は4,000円から2,000円に下げることとした。

行事（近藤）

1. 宇都宮例会の参加者は277名、懇親会参加者は112名であった。博物館で行われた普及行事は、参加者総数243名、講演会参加者は100名前後であった。
2. 仙台年会における講演の申し込みは、口頭91件、ポスター38件であった。
3. 学会講演プログラムを会員に送付した。
4. 次回年会・総会は千葉大での開催を検討中。次々例会については、愛媛大、金沢大、琵琶湖博物館などに打診中。
5. 前回例会や、最近の他学会の大会などで盗難が相次いでいる。盗難防止のため、年会・例会開催期間中の貴重品の管理について会員に注意を喚起するとともに、懇親会時の荷物の管理について開催校に相談することとした。
6. 2008年仙台年会の開催経費として、学会から446,557円の支出を承認した。また、シンポジウム非会員招待講演者の旅費宿泊費47,440円の支出を認めた。

国際交流（真鍋）

1. 2年後のAOGSを日本に招聘することを前向きに検討しており、招聘する場合には古生物セッションをたてるかどうか検討する必要がある。
2. 2008年度地惑連合大会時に開催された国際委員会に出席した。加盟49学協会中、約20名の代表者が出席した。
3. 当委員会副委員長に日本地質学会の国際委員会担当者である東北大学の石渡 明氏が任命された。
4. 2010年開催予定のAOGS (Asia Oceania Geosciences Society) の開催地は、6/18の投票で決定する。日本開催の場合には、地惑連合との連携をはかるため6月第1週に幕張地区で開催される可能性が高い。しかし、会費が連合大会の数倍となるため、相互参加や連携程度はまだ不明である。
5. サイクロンと地震に関する当連合としての声明案を回覧した。中国への調査研究訪問の際には、当連合所属学協会が窓口（日本地震学会など）として調整を行うこと、研究成果の迅速な社会還元を行ってゆく旨が盛り込まれている。中国・青島開催のアジア学術会議で発表予定。

企画・広報（甲能）

1. 古生物学会ホームページ質問箱に何件かの質問があったが、中には商業ベースの下請けのようなものもあった。このような質問に対しては、学会として一貫した対応方針と返答を用意しておく必要がある。
2. 年会・例会の広報活動（報道対応）に関するマニュアル作りを進めている。原案が出来次第、常務委員会に諮る予定。

電子ジャーナル（真鍋）

1. UniBioは2007年1月からBioOne2に掲載され、1年間で35,653件のフルダウンロードがあり、そのうちPRのダウンロード数は

3,926件であった。このダウンロード数に応じて、BioOneからUniBioに支払いが行われ、本会にも配分される予定である。

2. 会員がBioOne上の電子版を学会HP経由で閲覧できるようにするために、IDとパスワードによる認証機能が必要となるが、その運営経費節約のためにIDとパスワードを全会員共通にすることとした。出版後1年経過した巻号でJ-stage非掲載分については、学会HP上から直接ダウンロードできるようにする。
3. 学会HP経由でBioOne2のファイルにアクセスするシステムの構築がほぼ完了した。

友の会（加瀬）

1. 銀行口座の管理を学会事務局に移し終えた。

その他

1. 本会が後援した第5回国際会議「四肢動物の二次的水成適応」(6月9日～13日、国立科学博物館)が無事終了した。
2. ウェブベースの会員管理システム（入退会申請、会員情報入力など）について、利便性とコストの両面から検討した結果、20年度の事業計画への計上を見送り、今後の状況を見ながら適宜検討することとした。
3. Saito *et al.* 復刻版CD-ROMについて、東大出版会などへの謹呈分4部の他に、編者無償分10部と、編者が販促用に原価(1,000円)で10部買い取ることを認めた。
4. 今年度PRの印刷ページが増加する見込みなので、Language editorへの謝金を相対増額することを認めた。

会員の入退会報告（前田）

前回の評議員会以降、入会18名（川手友美子君、黒須弘美君、佐々木悠君、佐々木未来君、関谷 透君、入江美沙君、Casenove David君、福本奈由君、梶 智就君、野崎莉代君、山田安美君、Bernard Aurelian君、氏野 優君、川島実香君、宇都宮正志君、塚田真幸君、中平真一君、伊藤 剛君）、退会10名（大江ルミ君、古尾谷浩之君、西原ちさと君、田村芳隆君、早川直樹君、田中利雄君、船越郁生君、工藤路江君、金子正彦君、山谷 崇君）、逝去1名（菅野三郎君）があった。2008年7月3日現在の会員数は1,093名である。

編集状況報告

欧文誌（大路）

1. 12巻1号は発行済みで、12巻2号は10編を掲載し、すでに納品され、現在発送中である。12巻3号は7編を掲載予定でLanguage editorに送付中である。現在、受理済み16編、査読待ち3編、査読中5編、著者修正中14編、修正稿再投稿2編、拒否3編である。12巻3号に予定していた大阪年会シンポジウム特集号は、13巻1号に変更した。
2. 表紙の化石の図柄を掲載論文の中から選ぶようにした。
3. 電子投稿システムをShort Notesの投稿に合った仕様に変更した。
4. ISI登録が認められたので、国際誌としての評価を高めるため、PaleoNetなどを利用して、海外からの投稿数を増やす必要がある。また、編集体制を強化するため、原稿の体裁をチェックするTechnical editorの雇用を検討している。

化石（西）

1. 現在、論説9編、解説3編、口絵1編を受付中である。論説については、受理2編、著者修正終了2編、著者修正待ち3編、査読中2編の状況である。85号に宇都宮例会シンポジウム特集号（論説7編）を予定している。
2. 現在、特集号を含む受付原稿の数が多いため、印刷予算の増加や特集号を分割して出版するなど、今後の出版計画を考える必要がある。

特別号（加瀬・西）

1. 投稿がない状況が続いている。出版しやすくするためには、出版形態の変更を検討する必要がある。
2. バックナンバーの割引販売について、宇都宮例会や会費請求の際またHPにおいて広告した結果、108名が購入し96万円の売

り上げがあった。

3. 仙台年会の会場で Saito *et al.* 復刻版の CD-ROM の販売を開始する。今年度の地質学会や古海洋シンポジウムにおいても販売を予定している。

連合・学術会議報告

地惑連合（小笠原）

1. 5月28日の連合大会中に開催された評議員会に参加した。
2. 連合の法人化に向けての検討が進められている。法人化に向けての検討委員会が発足し、古生物学会からは生形貴男君が参加することになった。
3. 5月に幕張で連合大会が開催され、古生物学会は「地球生命史」と「化学合成生態系の進化をめぐって」のセッションを開催した。
4. 地学オリンピック委員会がフィリピン大会に向けて4名を選出した。

学術会議（第三部地球惑星科学委員会）（北里）

1. 第三部地球惑星科学委員会の各分科会で、20期のまとめとして提言や記録を作成している。
2. 学術会議シンポジウム「地球環境の変動—科学の目で見るとの面白さ」（2008年3月21日、日本学術会議講堂）を開催した。
3. 5月の地惑連合大会で、ユニオンセッション「地球環境問題と地球惑星科学の果たす役割」、「地球惑星科学の進むべき道（2）」を開催し、全国地球惑星科学系専攻長学科長会議を招集した。
4. 地球環境サミット・G8サミットに関連した「地球温暖化等、人間活動に起因する地球環境問題に関する検討会」を提案し、学術会議全体の課題別委員会として実現した。
5. 21期に向けて、会員・連携会員を選考中である。

IYPE 小委員会（植村）

1. 小委員会の設置期間は2008年3月末までとなっていたが、国際組織の活動が2010年まで続くため、学術会議の会期末である2008年9月30日まで延長となった。
2. IYPE を契機として開始された「地質の日」やジオパークなどの活動が報告された。

IPA（真鍋・北里）

1. IPA が後援する会議およびシンポジウムが、2008年8月にオスロで開催される IGC と2009年8月にカナダでの”International Conference on the Cambrian Explosion”において開催される。
2. 第3回IPCは、2010年6月末あるいは7月初めに、約1週間の予定でロンドンの大英自然史博物館で開くことが提案されている。この時期は古生物学会の75周年記念大会と重なる可能性がある。

自然史学会連合（甲能）

1. 政府による公益法人・公益事業の見直しに絡み、学会出版物が課税対象となる危険性が紹介されており、連合としては事態の推移を見守ることとなった。
2. 大阪府の博物館施設見直しに対して、地元研究者から出された府知事宛の要望書に連合として支持するため、各学会の承認を得ることになった。
3. 今年度の講演会は、11月15日に千葉県立中央博物館において、「自然史研究最前線—恐竜からDNAまで—」というタイトルで開催される。

分類学会連合（佐々木；代理生形）

1. 2008年4月10日（木）13:00～15:00に第19回の役員会が科博新宿分館で開催された。
2. 2009年度より、Web, NL, DB, 出版、メーリングリストなどの事業を行う広報出版委員会を設置することとなった。本学会の佐々木猛智君が委員会の委員長に選出された。
3. 大阪府の博物館施設見直しに対して、昆虫担当学芸員協議会による大阪府への要望書を支持する書面を作成した。

将来計画委員会報告（小笠原）

1. 古生物学会では、地惑連合大会における古生物学会提案セッションへの会員の積極的参加を促している。しかし、古生物学

会年会・例会や地質学会などを含めた年4回以上の学会参加は、会員にとって負担となりがねない状況である。それでも連合大会への関わりは古生物学会にとって重要であるため、今後は年会の開催時期や例会のあり方などを含めて検討する必要がある。

2. PRがISI登録されたことにより、約2年後にはImpact Factorが付くため、内外からの投稿数が増加することが予想される。特別号も含めた学会出版物の出版形態や編集運営体制など、より質の高い出版物を出すための方策を模索する必要がある。
3. 学会賞と学術賞の間をつなぐ賞の新設などが今後の検討課題である。

その他（北里）

1. 文科省から各大学・研究機関・学会に届いている文部科学大臣表彰の推薦依頼に対して、独創的・萌芽的な研究をしている若手の推薦が望まれる。
2. 日本学術振興会の学術システム研究センターで研究員（任期2年）を公募している。
中堅会員にセンターの仕組みを勉強してもらうためにも、会員の応募は有意義である。

審議事項

学会賞の決定

学会賞（横山賞）について、池谷仙之君への受賞を決定した。

学術賞・論文賞の決定

学術賞・論文賞を決定した。受賞者と受賞題目は以下の通り。

学術賞：真鍋 真君「中生代爬虫類の古生物学的研究」

論文賞：椎野勇太君・鈴木雄太郎君「Articulatory and muscular systems in a Permian concavo-convex brachiopod *Waagenoconcha imperfecta* Prendergast, 1935 (Productida, Brachiopoda)」*Palaeontological Research*, vol.11, no. 3, p. 265-275.

論文賞：佐藤友美君・神谷隆宏君「Taxonomy and geographical distribution of recent *Xestoleberis* species (Cytheroidea, Ostracoda, Crustacea) from Japan」*Palaeontological Research*, vol. 11, no. 2, p. 183-227.

特別会員候補の推薦

川辺文久君、和仁良二君、渡部真人君、鵜野 光君、熊澤慶伯君、田口公則君、成瀬 元君、関口智寛君、藤川将之君、金 光男君、石田 桂君、櫻井和彦君、一瀬めぐみ君の計13名が特別会員に推薦され、これらを承認した。会員資格変更を受諾するかどうか個別に打診する。

名誉会員の推薦

鎮西清高君、濱田隆士君、速水 格君を名誉会員に推薦する案を総会に諮ることとした。

賞の委員半数改選

真鍋君と植村君を新たに選出した。非改選の生形君（幹事）、西君、小笠原会長、大路PR編集長の6名で2008年度賞の委員を構成する。

ポスター賞選考委員の選出

2008年年会のポスター賞選考委員に、間嶋君（委員長）、前田君、遠藤君、柳沢君、大路君を選出した。

2009年年会・総会開催地の決定

2009年年会・総会の千葉大学での開催を決定した。開催日は2009年6月26日（金）～28日（日）。

第158回例会シンポジウム案について

第158回例会シンポジウム案「琉球列島の固有生物相の起源と成立プロセス（世話人：小澤智生君）」を承認した。

75周年記念事業について

学会事務センター破綻の後、緊縮財政を徹底したことにより学会基金が年々増額している。この基金の一部をもとに75周年事業を行い、会員の負担増に報いるためにも会員サービスを積極的に図りたい旨が提案され、記念事業の実行委員会の立ち上げを了承した。委員選考や企画・運営については常務委員会に一任するこ

とし、その予算については会計と詰めることとした。次回常務委員会で委員を選考する。

2007年度決算について

2007年度の決算案について検討し、これを承認して総会に付議することとした。当初予算案との差額（-329万円）については、特別号の売り上げや会費納入率の向上などの会務努力によるものであることを総会で説明する。

2008年度予算案について

予算案について検討し、これを承認して総会に付議することとした。学会基金繰り入れ支出（732万円）については、会計が一本化されたことに伴う措置である旨を総会で説明する。

会則第18条及び19条の改訂について

会則第18条及び第19条の改訂原案を検討し、若干の修正を加えた以下の改訂案を総会に諮ることとした。

第18条

第5文「総会は会員の十分の一以上の出席をもって成立する。」の後に「但し、委任状の提出をもって出席とみなす。」の文言を追加。

第19条

旧) 総会に出席しない会員は他の出席会員にその議決権の行使を委任することができる。但し、欠席会員の議決権の代行は1人1名に限る。

新) 総会において、会員は他の会員にその議決権の行使を委任することができる。但し、議決権の代行は1人1名に限る。

評議員会運営規則申し合わせ5)の改訂について

会員名簿は、個人情報保護法の施行を受けて発行を凍結しているが、日本古生物学会評議員会運営規則付則5)には名簿を2年に1回発行すると明記されており、現状は規則との整合性がとれていない。そこで、当該条文「会員名簿は、2年に1回発行する。」の一文を削除する改訂原案を承認した。ただし、当該条文削除は将来の名簿発行を制限するものではないことも確認した。

会計規則第2条の改訂について

学会基金を利用した助成事業を行えるように、日本古生物学会会計規則第2条を以下のように改訂する原案を承認した。

旧) 日本古生物学会は、不定期出版物の刊行と周年記念事業のために、基金を設けることができる。

新) 日本古生物学会は、不定期出版物の刊行、周年記念事業及び助成事業のために、基金を設ける事ができる。

PR科研費の今後の方針について

科研費研究成果公開促進「学術定期刊行物」への申請条件として、競争入札による印刷業者の決定が求められている。競争入札の実施が大きな事務的負担を伴うのに加えて、この科研費が今後どうなるかも不透明であるが、一方で競争入札により印刷費が大幅に圧縮されたことも事実である。今後他学会の動向も探る必要があるが、今年度はとりあえず単年度契約の入札を前提とした科研費申請を行うこととした。

総会議事の確認

総会の議事次第と段取りを確認した。

2008年度総会

2008年7月4日（金）16:20～17:50、大阪市立大学学術情報総合センター10階会議室で開催された。出席94名、委任状22名の計116名が参加（定足数110名）。議事次第は以下の通り。

1. 開会

2. 会務報告

- ・規則・規定・内規の変更点。
- ・2006年度の会員動向：入会45名、退会27名（うち逝去3名）、会員数1,093名。
- ・行事関連：大阪年会と宇都宮例会の報告、次回例会（沖縄）、年会（千葉）の予定。
- ・学会誌：PRのISI登録決定、PR印刷競争入札実施、科研費採択。

3. 地球惑星科学連合、学術会議、自然史学会連合報告

- ・地球惑星科学連合：活動報告、法人化計画。
- ・学術会議：活動報告。
- ・自然史学会連合：活動報告、今後の予定。

4. 名誉会員の推戴

鎮西清高君、浜田隆士君、速水 格君。

5. 学会賞・学術賞・論文賞の授与

学会賞：池谷仙之君

学術賞：真鍋 真君

論文賞：椎野勇太・鈴木雄太郎君、佐藤友美・神谷隆弘君。

6. 会則第18条及び19条改訂

7. 会計規則の制定について

8. 2006年度決算報告

9. 2007年度事業計画および予算案

10. 閉会

各賞贈呈文および受賞ポスター

日本古生物学会学会賞（横山賞）

池谷仙之殿

池谷仙之氏は、介形虫類を長い時間軸での生物進化研究のモデル生物と位置づけ、生物学的立場から現生・化石介形虫類の比較解剖、個体発生、個体群動態、生物地理、系統分類などの研究を推進し、内外の定評ある学術雑誌に多くの論文を出版し、国際的に高く評価される顕著な業績を挙げた。また、当該分野の国際交流にも尽力し、世界の介形虫研究を牽引する役割を果たしてきた。貝形虫類は節足動物門甲殻綱に属し、その微小な形態からは想像できないほど複雑な体制を有し、現世のあらゆる水界に高い種多様性を保ちながら繁栄している。しかも石灰質の背甲を持つことから化石としての保存性が高く、顕生代を通じてきわめて豊富な化石記録があるという、研究材料としての介形虫の利点がある。

池谷氏は、これら介形虫の利点を生かしつつ、野外での調査・研究を重視し、対象とした種の分布域を網羅して生息環境や地理的分布を調査するとともに、集団標本に立脚して個体成長や個体変異を十分に吟味した上で種分類の検討を行なった。池谷氏自ら採集した、産地データの豊富なトボタイプに基づく研究は、信頼性の高い系統分類学的研究や、統計的处理に基づいた群集解析による新生代北半球の環境変動の研究として結実していった。池谷氏のもう一つの研究方向は、現生介形虫のコントロールされた飼育実験に基づく分類基準の確立である。野外で得られた豊富な材料と実験環境下における形質評価の二つの研究手法の組み合わせは、介形虫という分類群をこえて、他の分類群の研究者に多大な影響を及ぼし、本邦の古生物学研究の方向性に大きな影響を与えた。

1985年には、静岡市において第9回国際オストラコーダシンポジウムを開催し、池谷氏は、この会議の事務局長として会議の計画実施の中心となった。この成果は花井哲郎・池谷仙之・石崎國熙編の「Evolutionary Biology of Ostracoda (1988)」として結実した。さらに、2001年、再び静岡の地で第14回国際オストラコーダシンポジウムを開催し、シンポジウムの会長としてこの会議を成功させた。この成果は池谷仙之・神谷隆宏・T. M. Cronin編集のPalaeogeography Palaeoclimatology Palaeoecology誌の特別号(2005)と池谷仙之・塚越 哲・D. J. Horne編集のHydrobiologia誌の特別号(2005)として刊行された。

池谷氏は、大学の指導学生ばかりでなく、学会を通じた積極的な後進の指導にあたり、現在、国内外の大学・研究機関において第一線で研究している多くの研究者を育成した。さらに日本古生物学会会長、国際オストラコーダ研究会議長など、まさに日本と世界の介形虫研究の中心的役割を果たして来たとと言える。

一方で、ヨーロッパやアメリカなど介形虫研究の先進的な地域の研究者との交流にも尽力し、日本学術振興会による日米共同研究を推進し、同じく日本学術振興会の助成によってフランス、ドイツ、イギリスなどから多くの外国人研究者を招聘することにより、日本の介形虫の研究の底上げを計り、また、日本の研究を世界に広めた。さらに、Journal of Micropalaeontologyなどの国際学術雑誌の編集委員として、世界の学問の向上にも尽力してきた。このような池谷氏の業績に対して、1984年、日本古生物学会学術賞（新生代介形虫の分類および生態に関する研究）が贈られた。

池谷氏の研究成果は、和文英文含めて75編以上の論文となり、また、研究者用の専門書として、英文和文併せて18編以上の著書を世に出している。さらに、「地球生物学」・「進化古生物学」等の新分野の提唱と併せて、大学院生や一般読者も視野に入れた啓蒙書を1993年から2004年までに4冊出版した。これらの著書による古生物学をはじめとした自然史に関する学問の普及、特に高校生、学部学生などの啓蒙に果たした役割は非常に大きいと言える。

本学会の活動としては、常務委員・幹事（1985-2002）、評議員（1989-2002）、会長（1997-1999）、「化石」編集長（1999-2002）を勤められた。会長就任時には古生物学会の年会や例会の改革など画期的な仕事をされた。さらに1992年から日本学術会議古生物学研連委員、同委員長等、各種の政府専門委員の活動を通じて、古生物学とそれに関連する研究分野の重要性を訴え、その発展に貢献された。

以上のように、池谷氏は一貫して古生物学の研究教育に尽力し、国内外を通じて広く社会に活躍する幾多の有為な人材を養成した。加えて同氏は国際的な介形虫の研究を通して日本と世界の学問発展に貢献し、世界に日本の微古生物学の高いレベルを広く認めさせることになった。

日本古生物学会は以上のような池谷仙之氏の業績を讃えたと共に、同氏の本会に対する著しい貢献を顕彰するため、ここに学会賞を贈呈し、感謝の意を表する。

2007年度日本古生物学会学術賞

真鍋真君：中生代爬虫類の古生物学的研究

真鍋真君は、横浜国立大学の小池敏夫教授のもとで構造地質学、微古生物学を学んだ後、同大学院で長谷川善和教授のもとで古脊椎動物学の勉強を開始した。1986年、フルブライト奨学生としてミュール大学大学院に留学し、John H. Ostrom教授に指導を受け、さらに英ブリストル大学大学院でMichael J. Benton教授の指導を受けた。ブリストル大学でPh.D課程を修了した後、1994年に国立科学博物館に勤務し、現在に至る。真鍋君は、日本各地で自然系博物館の整備が進められ、各地で脊椎動物化石の調査研究が活発化し、恐竜などの特別展などが多く実施されるようになった時代に帰国し、以来日本における古脊椎動物学研究およびそのアウトリーチに中心的な役割を担って来た。

真鍋君は、魚竜の胚の記載、個体発生に関する研究でPh.Dを取得し、その後、四肢動物の二次的水生適応における収斂進化に関する研究に数多く取り組んで来た。1999年には、岐阜県大野郡荘川村（当時）に分布する下部白亜系手取層群大黒谷層から新種の爬虫類 *Shokawa ikoi* など、英ユニバーシティカレッジロンドンのSusan E. Evans博士と報告した。*Shokawa* が属するコリストデラ類は、ワニと収斂的な進化を示す水生爬虫類だが、首長竜のように首が著しく伸長する形態進化があったことを *Shokawa* で明らかにした。平行して、カナダ・ロイヤルティレル博物館の故Elizabeth L. Nicholls博士とともに、カナダのロッキー山脈の上部三畳系の海成層から大型の魚竜の全身骨格を発掘し、2004年に *Shonisaurus* 属の新種として報告した。この *Shonisaurus shikaniensis* は推定全長21メートル、魚竜はもとより水生爬虫類として史上最大級の動物だったことが判明した。2006年には、佐藤たまき博士、長谷川善和博士の首長竜フタバズキリュウ *Futabasaurus suzukii* の研究にも参加している。同年には、石川県白山市桑島の下部白亜系手取層群桑島層から、Susan E. Evans教授と *Kaganais hakusanensis* も報告している。本種は、モサ

サウルスなどに近縁だとされるドリコサウルス類の世界最古の化石記録であるとともに、非海成層から同類初の報告となった。この報告は、モササウルス類やドリコサウルス類など白亜紀後期のトカゲ類の海生適応の起源の議論に大きな影響を与えた。

恐竜に関しては、長谷川善和博士とともに「加賀竜」、「茂師竜」、「山中竜」、「御船竜」など日本列島で初期に発見された恐竜化石の記載を行った。福井県大野郡和泉村（当時）からの下部白亜系手取層群から発見された歯化石をティラノサウルス類と同定し、ティラノサウルス類の吻部の形態的な特殊化がその進化の初期に起こっていた可能性、そしてティラノサウルス類の初期進化の場が白亜紀前期のアジアだった可能性を1999年に指摘した。この説は、後に2003年の中国遼寧省の熱河層群の *Dilong* の発見などで支持、補強されている。1990年代後半、中国の下部白亜系熱河層群は羽毛恐竜などの発見によって世界的な注目を集めていたが、その動物相はジュラ紀後期的な要素を示すことから、白亜紀前期の東アジアはジュラ紀後期型の動物のレフュージアだったという仮説が提唱されていた。真鍋君は、手取層群桑島層から発見された指骨が、オビラプトロサウルス類もしくはテリジノサウルス類に分類出来ることなどから、白亜紀後期型の動物の存在を指摘し、新旧の要素が混在する場であったことを指摘した。この論文は、2000年にNature誌に掲載されたが、熱河層群、手取層群でその後、この説を裏付ける化石が産出し続けている。

真鍋君は、手取層群で小動物や断片的な化石の研究を行うことで、それまで見落とされていた生態系の要素を知ることの重要性を認識し、同様の手法を北アメリカのK/T境界付近の研究にも応用した。白亜紀最末期の北アメリカのHell Creek層では、従来、恐竜の多様性が徐々に低下して行ったと考えられていた。真鍋君はサウスダコタ州のサンディサイトと呼ばれる化石産地などの研究から、マーストリヒト階を通して、恐竜の多様性が低下していなかったことを、米ノースカロライナ州立大学（当時）のDale Russell教授と2002年に報告した。

真鍋君の研究は恐竜や水生爬虫類にとどまらない。Susan E. Evans博士と2008年に報告したトカゲ類の新種 *Kuwajimalla kagaensis* は、植物食のトカゲとしては世界最古の化石記録となった。白亜紀前期は、被子植物の出現、多様化が起こった時期であることから、注目を集めている。手取層群北谷層と桑島層から産出した白亜紀前期の哺乳類2新種の報告にも参加している。

真鍋君はこのように研究面で高い評価を受けているのみならず、後進の指導やこれからの古生物学者発掘のために精力的に活躍している。彼の研究室は恐竜学、古脊椎動物学を目指す学生・大学院学生を受入れ、実質的な指導を行い、多くの若手古脊椎動物学者を育てている。多くの若手研究者に慕われるのは、彼自身の研究能力の高さに加え、温厚で面倒見のよい性格によるところが大きい。

真鍋君は、博物館の研究、普及活動やコレクションの保全に関する活動にも尽力している。国立科学博物館では、常設展示、学習プログラム、特別展などに積極的に関わり、「恐竜博2005」は、化石標本の魅力にとどまらず、恐竜から鳥類への「進化」の具体的なプロセスを解説することに成功した展示として高く評価されている。また、彼は、日本学術会議20期の自然史・古生物学分科会に連携会員として所属し、博物館法の改正案に対する対外報告書の作成において中心的な役割を担った。

日本古生物学会は、ここに真鍋真君のこれまでの努力と成果を高く評価し、学術賞を贈って今後の一層の発展を期待する。

2007年度日本古生物学会論文賞

椎野勇太君・鈴木雄太郎君：Articulatory and muscular systems in a Permian concavo-convex brachiopod *Wuagenoconcha imperfecta* Prendergast, 1935 (Productida, Brachiopoda). Paleontological Research, vol. 11, no. 3, pp. 265-275 (2007). (ペルム紀凹凸形態型腕足類ワーゲノコンカ・インパーフェクタの殻開閉システム)

過去の生物の生活型や行動を復元して化石標本に“生命を吹き込む”ことは、古生物学ならではの醍醐味であると同時に、古生物学者でなければ遂行できない科学的課題の一つである。普及書に描かれる復元図は、それが科学的根拠に基づく限りにおいて、人々に古生物学の成果をわかりやすく伝えるために効果的な表現方法である。しかしながら、とりわけ古い時代の古生物については、その生活型や行動の復元は決して容易なものではない。長らく信じられてきた復元が間違いであることが判明したような事例を聞く度に、我々は改めてそのことを思い知らされる。

古生代の凹凸型腕足類 productid 類は、従来、ホタテガイのように殻を活発に開閉して、採餌のための水流を発生させていたと考えられてきた。それというのも、殻の内側に巨大な閉殻筋の痕のような構造が見られるためである。これに対して、椎野勇太君と鈴木雄太郎君は、宮城県に分布するペルム系上八瀬層産の保存良好な *Waagenoconcha imperfecta* を用いて関節部の構造を精査したところ、構造上の制約からせいぜい6度程度しか殻を開けることができなかったことを明らかにした。そこで椎野・鈴木両君は、従来巨大な“閉殻筋痕”とされていた、腹殻の内側に発達する多数の溝のような構造について詳細に観察した結果、断面で見たときの溝の開口方向が、想定される閉殻筋の伸長方向と明らかに異なることを見出した。さらに、現生 terebratulid 類との比較形態学的検討を加えた結果、この巨大“閉殻筋痕”が実は閉殻筋痕ではなく外套管腔の痕であり、正中線の両側に位置するより小さな二対の筋肉痕がそれぞれ閉殻筋と閉殻筋の痕であることを明らかにした。そして、productid 類の一種である本種が、貧弱な殻開閉システムしか持たず、したがって能動的な採餌流を形成することはできなかったと結論付けた。

以上のように、椎野・鈴木両君は、殻の外側からは見えない内部の構造について現生種と比較しながら注意深く観察し、こうした構造に対する従来の解釈とそれに基づく行動復元を根本的に改訂した。本研究は、最先端技術への依存度を高めつつある今日の情勢にあってなお、詳細かつ注意深い観察と深い機能形態的洞察によって古行動学的定説を覆すことができることを示した好例であり、単なる腕足動物の一事例研究にとどまらず、比較形態学・機能形態学に基づく個古生態復元の範を示したものと言える。日本古生物学会は、椎野勇太・鈴木雄太郎両君の努力とその研究成果を高く評価し、ここに論文賞を贈り、今後の一層の発展を期待する。

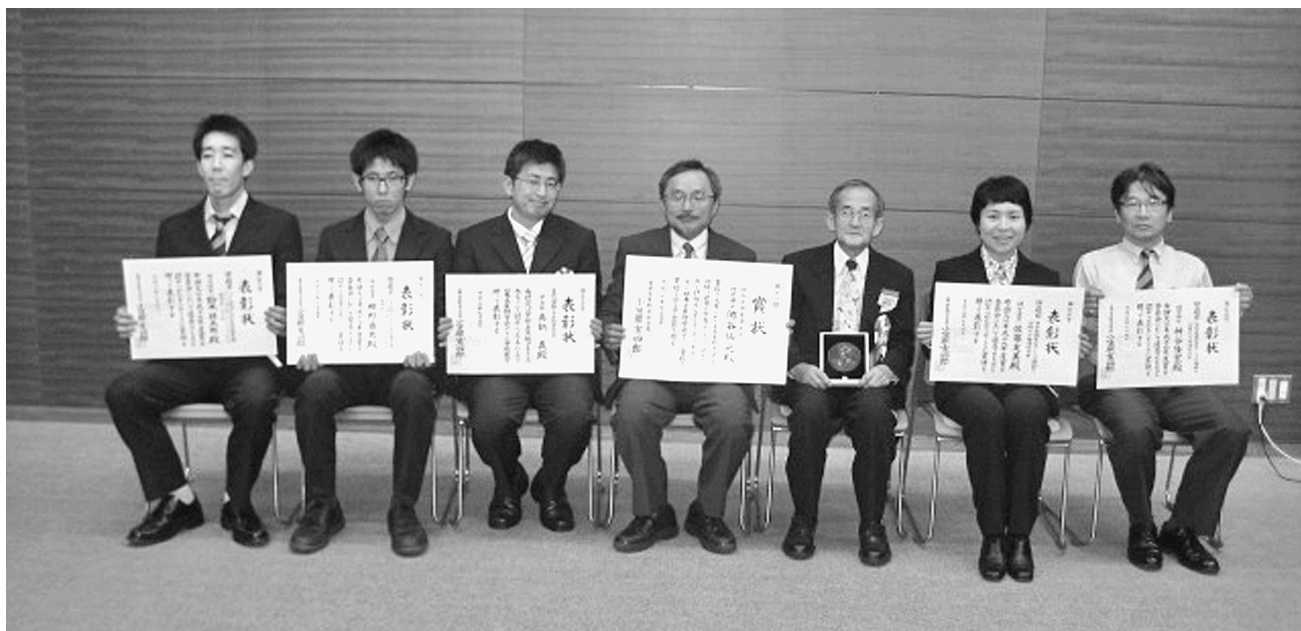
2007 年度日本古生物学会論文賞

佐藤友美君・神谷隆宏君：Taxonomy and geographical distribution of recent *Xestoleberis* species (Cytheroidea, Ostracoda, Crustacea) from Japan. *Paleontological Research*, vol. 11, no. 2, pp. 183-227 (2007). (本邦産現生ゼストレベリス種群の分類および地理的分布)

本論文は日本の沿岸域に生息する貝形虫の *Xestoleberis* 属の種を日本全域の122産地から発見し、7新種を含む13種を記載し、それらの系統関係を推定し、生物地理を明らかにしたものである。*Xestoleberis* 属は潮間帯から浅海に汎世界的に生息する代表的な貝形虫であるが、殻形態が単純なためか、その属内の系統関係や進化史は、日本はもとより世界的にもほとんど解明されていなかった。

本研究に用いた貝形虫標本は、南は沖縄本島・奄美大島から九州・四国・本州、北は北海道オホーツク海にかけて1986年～2003年の17年間以上にわたり系統的に採集したものである。標本は主として波打ち際近くに繁茂する紅藻類のピリヒバ (*Corallina pilulifera*) やウミトラオノ (*Sargassum thunbergii*) から採取した。7新種は、*X. ikeyai*, *X. kuroshio*, *X. magnoculus*, *X. notoensis*, *X. planuventer*, *X. ryukyuensis*, *X. sesokoensis* で、加えて *X. sagamiensis* Kajiyama, 1913 も再記載している。本研究で雄性生殖器官形態に基づき識別した13種の背甲の微小孔の形態には、本論で図示しているように sieve-type, lip-type, simple-type の3つのタイプがあり、これらの孔タイプの組み合わせから、*Xestoleberis* 属が3つの種群に細分できることが示された。それぞれの種群は殻形態、筋肉痕の形態、オスの交接器構造などに関しても特徴を共有しており、系統を反映していると考えられる。さらに脱皮成長に伴い微小孔の分布パターンが種ごとに分化していく過程の解析から種群内の詳しい系統が復元された。

本邦沖縄から北海道沿岸における *Xestoleberis* 13種の分布が初めて体系的に明らかになったことから、本属の種が海中気候の優れた指示者であること、祖先的な南方種が日本海を経由して北方の冷温帯・亜寒帯へ分化・適応していった過程が示唆された。3つの種群のうちのひとつ、種群Bに属する2種は熱帯から亜熱帯に限定して産する。種群Cの4種は種ごとに温帯、亜寒帯など北方のひとつの海中気候区に限定して分布し、種群Aには熱帯・亜熱帯に限定して産する種と *Xestoleberis hanaii* などのように熱帯から亜寒帯まで広く分布する広温性の種が混在することも明らかにした。また、す



各賞受賞者

左から椎野勇太君・鈴木雄太郎君（論文賞）、真鍋真君（学術賞）、小笠原憲四郎会長、池谷仙之先生（学会賞）、佐藤友美君・神谷隆宏君（論文賞）

でCythere属貝形虫で報告されているが、南方系の潮間帯祖先種が、日本列島周辺で種分化し、北方域へ進出していった事象が、*Xestoleberis*属でも確認され、これが日本産潮間帯貝形虫の普遍的な進化パターンのひとつである可能性、この事象に氷河性海水準変動期の日本海が重要な役割をはたした可能性などが議論された。

記載は精密で、触覚、胸脚、小顎、大顎などの生物顕微鏡による詳細なスケッチと、背甲表面の感覚子（孔）や蝶番構造、成長段階別の微小孔の分布パターンなどの電子顕微鏡レベルの詳細な観察が組み合わさっており、これまで貝形虫研究者が培ってきた系統分類学的手法を満遍なく駆使しているといえる。本論はまさに最新の貝形虫の分類・系統学の一端が花開いた感があり、国際的に評価されるレベルの記載報告である。

以上のように本研究は、長年の地道な採集と、潮間帯付近の極浅海域の群集の日本列島の気候的特性を生かし、国際的レベルで*Xestoleberis*属貝形虫の分類系統と海洋生物地理を明らかにしたものである。

日本古生物学会は、ここの佐藤友美君と神谷隆宏君の努力とその研究成果を高く評価し、ここに論文賞を贈り、今後の一層の発展を期待する。

2008年度年会（7月東北大学）優秀ポスター賞

千徳明日香・江崎洋一

非造礁性群体六射サンゴの成長規則性 ―出芽の様式―

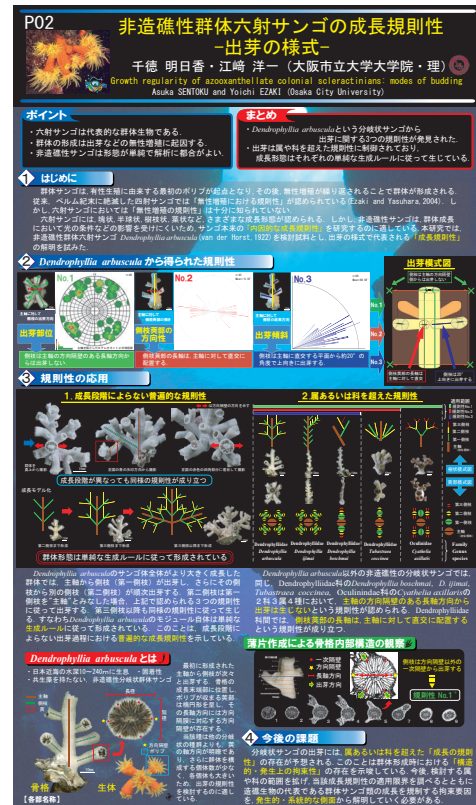
高橋 聡・海保邦夫・山北 聡・鈴木紀毅・大庭雅寛・掛川 武・永広昌之
パンサラッサ海遠洋域におけるペルム紀末～三畳紀前期の海洋環境変動

山田安美・伊藤 孝・本山 功・板木拓也・小泉 格・上栗伸一
日本海の過去の2万年間の古環境復元 ―C-GC8コアの放散虫群集解析―

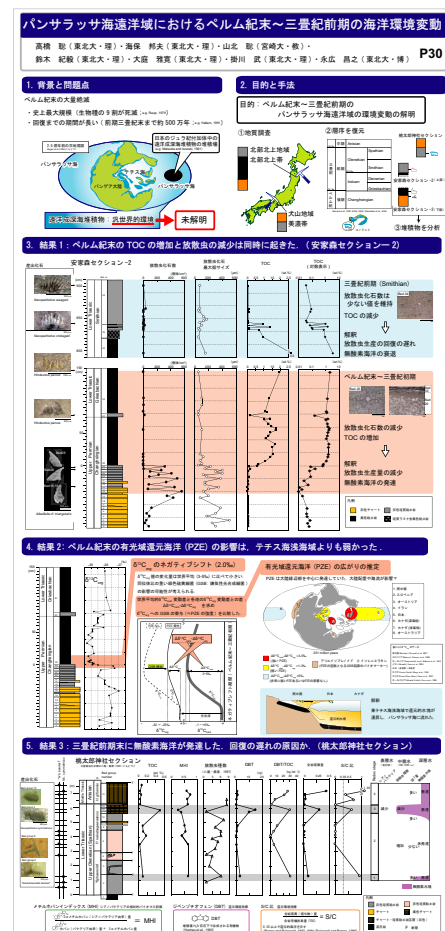


ポスター賞受賞者

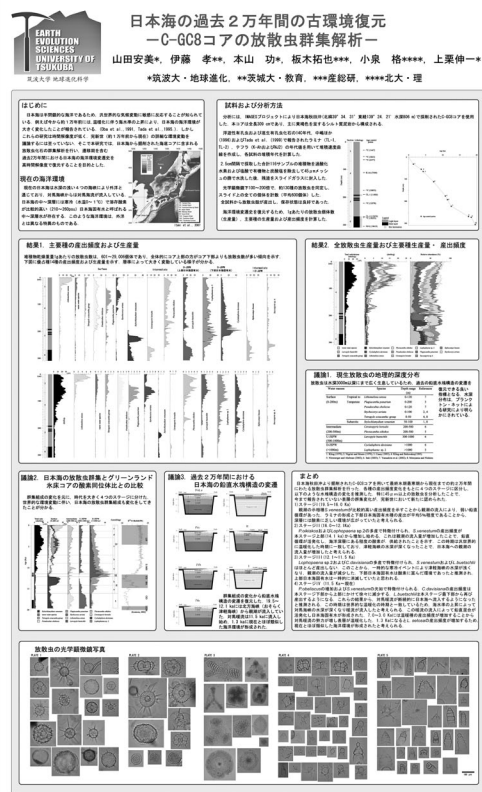
左から千徳明日香君、山田安美君、小笠原憲四郎会長、高橋 聡君



千徳明日香君ほかのポスター



高橋 聡君ほかのポスター



山田安美君ほかのポスター

釀金者御芳名

真鍋 真, 神谷 隆宏

平成 19 年 3 月 23 日～平成 19 年 9 月 18 日までの間に、上記の方々から本会へ釀金を賜りました。古生物および本会の活性化のため有効に使わせていただきます。ご厚志に対し深く御礼を申し上げます。

釀金のための郵便振替口座番号は次の通りです。
00130-6-776553 日本古生物学会・釀金口

編集委員会より

本号は特集号ではありませんが、皆様の多数の投稿をいただき、論説 7 編を掲載することができました。そのため、「化石」としてはこれまでの出版の中でも、かなりボリュームのある号となりました。その内容もカンブリア紀の胚化石、層序、植物化石、微化石、大型化石など多岐にわたっております。また、「化石」83 号で紹介しました「The 解剖学」の内容を解説記事として掲載させていただきました。生物学的な解説ですが、化石の解釈にも有益な情報となることと思います。これら多くの著者の方々に厚く御礼申し上げます。

表紙には話題となっている「丹波竜脚類」の産状および産出した化石の写真をご提供いただきました。現在、進行している研究の情熱が伝わってくる表紙です。さらに、口絵もモンゴルの風成層にみられる生痕化石のきわめて貴重な写真です。これらの写真のご提供に対しても、深く感謝致します。「化石」では、今後とも皆様の原稿の投稿をお待ちしております。

(西 弘嗣)